

苗箱数削減による水稲の低コスト化を実現（神石高原町）

【平成 29 年 7 月 11 日掲載】

神石高原町の株式会社ヴィレッジホーム光末（光末幸司（みつすえこうじ）社長，構成員 5 名，経営面積 32ha）では，使用苗箱数の削減による水稲の低コスト化に取り組んでいます。これは，苗箱に通常の 2 倍の種子粃（300g）を播種し，田植え機を調節して 1 株に植えつける苗の本数を 3～4 本とすることによって，使用苗箱数を大幅に減らす技術です。同社で昨年行った試験で実用性が評価された専用の高精度移植機を，今年度から新たに導入し，約 27ha で同機を使った田植えが行われました。その結果，10 アール当たりの使用苗箱数は 6.5 箱（昨年比 43%）と大幅削減となり，育苗・田植えに係る費用が 160 万円程度低減できました。また，苗の補給作業時間の半減によって，田植え作業の補助者は昨年までの 2 名から 1 名へと減らすことができ，余剰労力を白ねぎなどの他品目の管理に充てることによる経営全体としてのプラス効果が確認されました。

一方で，田植え時に水が多かった一部の圃場では浮き苗が多発し，補植を余儀なくされるなどの課題も見つかりました。光末社長は，「水稲の生産コストを大幅に減らせるだけでなく，余剰となる育苗ハウスを利用して野菜などの新たな品目にチャレンジできる。来年は今年明らかになった問題点を解決し，安定した田植え作業を確立したい。」と今後の経営に対する意気込みを語っています。

東部農業技術指導所では引き続きこの取り組みを支援するとともに，水稲の低コスト化に有効な技術として他の生産者への普及を進めます。



【高精度移植機による田植えの状況】



【300g 播種した「あきさかり」の苗】